

# 新教育運動における身体性の問題

## — 東洋的宗教性への憧憬 —

伊藤 敏子

### The Quest for Oriental Religions — Concepts of Corporeality in New Education —

Toshiko ITO

#### Abstract

Body, which was considered inferior to mind and was despised in the traditional educational discourse of the Occident, began to receive much attention around the turn from the nineteenth century to the twentieth century. Those who sought to recover a holistic life often sought to ground themselves in religious concepts of the Orient. Educators following the trends of their day, among them many theosophists and adherents of "Körperkultur", were attracted to oriental religions mainly by practices that emphasized salvation through the training of the body, as well as by the promise of a holistic life. Salvation in this sense required neither the belief in an absolute being (God) nor any mediating institutions (churches). Body concepts in the educational discourse of the period and in present-day phenomenological studies display remarkable affinities.

#### 1. はじめに — 教育議論における身体性 —

西洋の子どもたちのあいだでは今、鳥山明の『ドラゴンボール』が大きなブームとなっているらしい。この秋に開催された学会であるドレスデン大学教授は、自分の子どもたちもこの例にもれず百巻を超えるその鳥山作品のいずれかの巻を毎日のように手にしていると語った。何巻の何頁にどのようなエピソードが所収されているかをすでに熟知している子どもたちは、その日の気分によって迷うことなくひとつの巻を手にし、その巻のなかのお目当てのエピソードに没頭し、読み終わると満たされた表情で再び日常の生活へと戻っていくという。『ドラゴンボール』は一言でいえば修行の物語である。一連の修行はさまざまなかたちで新たなる身体との向き合いを問いかける構成となっている。東洋から発せられた修行ないしは身体という主題が西洋の関心事になるという現象を、しかしながら歴史はすでに100年ばかり前に体験している。19世紀から20世紀にかけての世紀転換期における心性史を紐解くと、工業化・都市化に象徴される文明化のうねりのなかで人間の生の全一性が害われているという危機感を抱いた人々のあいだで、東洋の一きわめて強い宗教的色調を帯びた一身体観のなかに西洋においては失われつつある人間の生の全一性を回復させる方途を求めようとする動向が確認される。

西洋的まなざしに映る東洋的発想の魅力をその淵源にまでさかのぼってみるならば、「身体を軸とする全一」<sup>1</sup>という世界観にたどりつくことになる。西谷啓治(1900-1990)は説く。「知性の科学化」の先進圏である西洋においては、人間に本来的であるはずの「全人的な統一点」の保持が早くから脅かされ

<sup>1</sup> 西谷 2001、100。この志向性は「現代」の西洋にとりわけ顕著となりつつあると西谷は分析する。

る状況におかれているのに対して、日本を含む東洋における思考形式には、「全一的な統一、しかもあらゆる分裂を克服し得る根本的統一への道」<sup>2</sup>を追求するという志向性が通底し、この追求の途上においては「人間存在の底辺である身体的なもの […] から一步も遊離しない」<sup>3</sup>という姿勢が貫徹されている。たとえば仏教における「法」と「行」の関係に典型的なかたちでみられるように、東洋的発想のなかでは真理への到達あるいは自己の自覚（法）にいたる道は身体をともなう行為（行）と不可分なものとしてとらえられる。日本に関してはさらに、身体性を軸とする思考形式が「音楽・舞踊・工芸・技術、農や商いの業」にいたるまで広く日常生活に根をおろしているということが特記されうる<sup>4</sup>。「行」と日常生活の営みとのあいだにみられるこの親和性は、日本における仏教普及の経路のもつ特異性と無縁ではないと思われる。すなわち、武士階層を中心に広がりを見せた禅仏教の場合には、座禅や日常の作務という身体的行動によって、とりわけ庶民階層に支持された念仏仏教の場合には、称名や踊りという身体的行動によって、いずれも日常生活における全一体験を可能なものにするという視座を呈示することで仏教は日本文化に浸透していく契機を獲得する<sup>5</sup>。

## 2. ドイツ語圏における教育構想のなかの身体性

ドイツ語圏には、「生命 (Leben)」を意味するゲルマン語から派生する Leib と、「物体 (corpus)」を意味するラテン語に由来する Körper が、ともに身体を意味する概念として共存している。語源に寄り添って解釈するならば、人間の身体が「感性のわき出る主体」とみなされるとき、それは Leib と呼ばれ、一方、人間の身体が「感性の収められた物体」とみなされるとき、それは Körper と呼ばれることになる<sup>6</sup>。16世紀にルター (Martin Luther, 1483-1546) が聖書を原典からドイツ語に翻訳するさいに、身体の訳語として Körper ではなく Leib を選び取ったのも、この語源学上の文脈にしたがえばきわめて自然な判断として理解される。というのも、聖書における Leib は、心身未分化なものとして記述されているからである<sup>7</sup>。このことは聖書において Leib が「神聖な精神の宿る殿堂」<sup>8</sup>として特別な価値を付与されていることにも端的にあらわれている。

しかしながら、人間が消滅することのない靈魂と消滅する運命にある身体から成り立つとするプラトン (Platon, ca. 470-399 v. Chr.) の人間観を援用する神学上の解釈に影響され、さらにデカルト (René Descartes, 1596-1650) の心身二元論によって確立される近代思想において決定的となるように、身体は精神 (靈魂) から切り離され、精神 (靈魂) に下位づけられるという見方が中世から近代にかけて西洋において支配的となる。こういった人間観のもとで、教育はその高尚な自己目的の先に「精神の高貴化・純化」をかかげる一方で、身体という問題をあるときは周辺部へと追いやり、あるときは単な

<sup>2</sup> 西谷 2001、100

<sup>3</sup> 同上。この道程は「知行合一的な行道」とも換言可能である。

<sup>4</sup> この種の世俗化の過程は、西谷によれば、日本以外の国の精神史・文化史にはみられない事象である (西谷 2001、111 参照)。

<sup>5</sup> 湯浅 1999、186 参照。知識・学問を媒介とするのではなく、身体的行動を媒介とすることで日常生活のなかに宗教的雰囲気へといたる可能性を開くことを通じて高い定着の度合いに達したのが日本仏教のもつ特徴といえる。

<sup>6</sup> Leib という概念に対する Körper という概念の位置付けは、プレスナー (Helmut Plessner, 1892-1985) の人間学において明快に提示されている。プレスナーが「世界に開かれた」存在すなわち「脱中心的」存在として人間を定義するとき、身体に対する人間の両義的關係がその根拠としてかかげられる。すなわち、人間は自分の Leib で「あり」ながら Körper を「もつ」存在であり、身体に対して「存在」と「所有」という二重の関係を結ぶことによって、他の動物から区別されることになるのである (vgl. Haneberg 1995, 15f. / Meyer-Drawe 2000, 149)。

<sup>7</sup> 聖書における心身概念については Oskar Dangel 氏から示唆を得た。ここに記して感謝したい。

<sup>8</sup> 1. Kor. 6, 19.

手段として軽んじることになる。

西洋の思想史において Leib に再評価への道が開かれるは、フォイエルバッハ (Ludwig Feuerbach, 1804-1872) およびニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) 以降のことである。ニーチェが「わたしは全き Leib であり、それ以外のなにものでもない」<sup>9</sup>と宣言するとき、あるいは「魂とは Leib に属するものを言い表す言葉にすぎない」<sup>10</sup>と説明するとき、そこで想定されているのは、心身二分化とは無縁なまごとの生命として把握された Leib である<sup>11</sup>。そこから、そのまごとの生命のひとつの表出として、たとえば舞踏のもつ教育的価値といったものが注目されるようになる。多くの新教育運動家たちは、直接的にあるいは間接的にニーチェの提起する身体観を追い風として新しい教育の展開を模索する航海へと出帆することになる。この流れのなかでは、従来は教育においてあまり顧みられなかった身体が芸術・運動・労働といったかたちで教育実践の表舞台に引き出され、そこから生の疎外に抗する人間形成の実現が企画される。

新教育運動における身体性への注目はしかしながら、間もなく訪れる国家社会主義の時代には容易に肉体的鍛錬さらには民族的イデオロギーへと転じられていく危うさを内包していることが露呈されることになる。この戦時下における体制への加担という過去への記憶から、ドイツにあって教育における身体性という主題の取り扱いが慎重にならざるをえず、その帰結として教育言説としての身体性は長く舞台裏に退いたままの状態におかれる。教育学の分野において身体性をめぐる議論を復活させるきっかけになったのは、1930年代にフランスで定立された現象学的身体を教育の文脈のなかで読み解こうとする1980年代のモレンハウアー (Klaus Mollenhauer, 1928-1998) の試みである。この試みはその後、マイヤー＝ドラヴェ (Käte Meyer-Drawe) らによって継承され、教育学の分野における身体論は Leib を単に「精神的自我とそれを取りまく物質的世界の媒体」ではなく、「われわれの構成要素であり同時にわれわれの世界である」<sup>12</sup>ものとしてとらえる方向で深化されつつある。

#### 【補足】

Leib と Körper とのあいだには、しかしながら、実際の語法において語源学的観点から想定される差異はむしろほとんどみられないといってよい。たとえば、18世紀の文学にあっては、「われわれにとって Leib はおおよそ生命と感性を、したがって本来的には精神を内包するものである」<sup>13</sup>という理解にもとづいて、「Leib よりも物質的なものとしての Körper」あるいは「肉体そのものとしての Körper (、肉体にとどまらず精神を表象するものとしての Leib)」という差異を意識した語法を指摘することが可能であるが、この時代の文学にあってはまた、Körper と Leib を同義のものとして扱う事例がきわめて多いことが同時に注視されなければならない<sup>14</sup>。

<sup>9</sup> Nietzsche 1968 (1883-85), 35.

<sup>10</sup> ebenda. ニーチェは Leib を「大きな理性」、Geist を「小さな理性」と呼び、それまで支配的であった Leib の Geist への従属という構図を反転させる。

<sup>11</sup> ニーチェはまた「小さい理性 [精神] を包み込む大きな理性」である肉体の肯定によって苦悩の肯定を行うが、この構想は禅の「已事究明」に重なるものである (西村 1999, 73 参照)。

<sup>12</sup> Meyer-Drawe 2000, 153.

<sup>13</sup> たとえば、メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn, 1729-1786) の作品、とりわけ 1755 年に刊行された『感情について (Über die Empfindungen)』は、Leib と Körper の語法を明確に区別している (vgl. Grimm 1884, 1835)。

<sup>14</sup> たとえば、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の作品では Leib と Körper の語法上の区別が意識されていない (vgl. a.a.O., 1936)。

### 3. ドイツ語圏における新教育運動のなかの身体性

西方ヨーロッパに位置するドイツでは、ことばに還元可能な真理への信頼が肥大し、逆に身体を通じての活動に対する関心はきわめて希薄であった。これはギリシア以東の文化圏においてみられた、ことばに置換されうる真理からこぼれおちた真理を想定し、身体の活動によってこれを追求しようとする姿勢とは、明らかに対照的である<sup>15</sup>。ところが、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期、道教、禅、ヨガ、武芸といった、身体性を重視する東方の思想への注目がとりわけ宗教性との連関において高まる。技術化、工業化、都市化が進むなかで、啓蒙時代をその端とする近代化の流れは、20世紀の幕開けを目前にしたこの時代にいたるまで自由主義、合理主義、科学主義、資本主義というかたちで展開され、この近代化の歴史は広く「無限の進歩への信仰」を抱かせる働きを演じることになる。一貫して肯定的な沿革としてとらえられてきた近代化の歴史はしかしこの世紀転換期、身体性へのまなざしをその根拠に「東洋の宗教性への回帰」<sup>16</sup>を唱える生活改革運動を軸として、東洋的な色調を帯びた文脈のなかでさまざまな言説を生み出すことになる。たとえば、仏教における修行を例にとると、修行は労働に代表される「外向的実践」すなわち「戒」と瞑想に代表される「内向的実践」すなわち「定」から成り立つが、そこでは「規則に定められた形に従って身体を訓練し、それによって自己の心の在り方を正してゆくこと」<sup>17</sup>が目指される。この根底には「心が身体を支配するのではなく、逆に身体の在り方が心の在り方を支配するという立場」<sup>18</sup>が横たわっている。ここで東洋の宗教性の示した求心力の所在は、「(性的なものを含む)身体力および精神力が高められるよう、身体と靈魂のあいだに健全な平衡を獲得する」<sup>19</sup>ことに求められ、その動機としては、アイデンティティの探求、全体性への希求といったものがあげられる<sup>20</sup>。当時大きな広がりを見せた神智学に代表される神秘主義的な流れは、その多くが東洋の宗教的なものへの憧憬に支えられ、その生成物語においても東西の融合による正当化への試みがみられる<sup>21</sup>。

東洋の身体論への憧憬を取り込みながら身体と向き合う態度は世紀転換期、理論として実践として新たな提案をつぎつぎと生み出し、「身体文化運動」を支えるかたちで結晶することになる<sup>22</sup>。一世を風靡した「身体文化運動」はしかしながら、一東洋への憧憬に帰される一秘教的、超自然的要素のため、図書館等の公的施設では関連文献が保存されず、私的文庫として関連文献が保存されている場合はその担い手の支持者のみに扉が開かれているため、これまで踏み込んだ研究はなされていないという状況にある<sup>23</sup>。この時代に注目された東洋的な身体論は、とりわけ知識階層の関心に合致する、東洋のもつ秘儀的、神秘的な

<sup>15</sup> 中山 2000、vi 参照

<sup>16</sup> Linse 1991, 325.

<sup>17</sup> 湯浅 2003、153

<sup>18</sup> 同 上。修行を徹底すると、身体と心の区別そのものが消失する。すなわち、修行とは、主体性の克服、自己の脱主体化へと導くことであり、「『心』がこのようにして自己の主体性を否定し去るとき、『身体』は逆にその客体としての存在性格をこえてしまう」(湯浅 2003、209)。

<sup>19</sup> Linse 1991, 337. 東洋の宗教性から導き出された身体的実践については Wedemeyer 2001 を参照のこと。

<sup>20</sup> Wedemeyer 2002, 251. たとえば重競技選手の父と呼ばれるジーベルト (Theodor Siebert, 1866-1961) は、自然の法則と調和することによって新しい人間の育成を試みるが、ジーベルト自身の自己認識は、神智学者であり、心靈主義者であり、さらに日本の武士道の崇拝者であった (vgl. a. a. O., 258)。

<sup>21</sup> vgl. Linse 2001, 280f.

<sup>22</sup> vgl. Wedemeyer 2004, 129ff.

<sup>23</sup> vgl. Wedemeyer 1999, 14. 「身体文化運動」に関連する資料としては、早くから体系的に収集され一般の研究者にも公開されているブルク・ルートヴィヒシュタインに集められた青年運動関係の資料が唯一の例外といえる (vgl. a. a. O. 27f.)。

雰囲気満たされた身体技術の実践にあり、具体的には呼吸法そしてヨガが広く受容されることになる。したがって、東洋のなかでもインドへの注目が軸となるが、しかし文明化と対置される自然と融合した「生の全一性」を保持した身体のあり方を説く中国の老荘思想もまた広く紹介され、さらには19世紀後半にすでに知られていた柔術が新渡戸稲造（1862-1933）の『武士道』（1899）の読者層を通じて東洋的自己修養の典型として「秘密科学」<sup>24</sup>の名のもとに定着をみたことにかんがみるならば、東洋に発する身体と向き合う態度は特定の国という枠を超えて一ときに折衷のプロセスを繰り返しながら—西洋で普及をみたといえる。

東洋の身体論と親和性をもつ教育論の代表的な存在は、同じ世紀転換期に全世界を巻き込んで展開された新教育運動の主たる構成員に共有されていた神智学との連関で語ることができる。オルコット（Henry Steel Olcott, 1932-1907）、ブラヴァツキー（Helena P. Blavatsky, 1831-1891）、ジャッジ（William Q. Judge, 1851-1896）が1875年にニューヨークで協会を設立したことに端を発して各国の支部を介して支持者層を広げていく神智学は、仏教や一元論を根幹として西洋と東洋の神秘思想を接合した新しい人間観を合理的科学の体系として呈示する<sup>25</sup>。仏教は1888年から1924年にかけて教会に批判的な知識階層を中心として西洋で注目されるが、ブラヴァツキーは古代仏教をしてあらゆる宗教の原宗教ともみなされうるものとして神智学の中核に位置づける。ブラヴァツキーの没後、神智学協会を率いることになるベザント（Annie Besant, 1847-1933）は、神智学によって唱えられた人間観を継承しつつ教育活動を展開するが、そのなかで身体への配慮を強調し、就寝のさいに窓を開放したままにすること、日光と大気を吸収しながら運動することの重要性を説いている<sup>26</sup>。

世紀転換期における身体性へと注目したさまざまな試みの生起するなかでひとつの奔流とみなされる「身体文化運動」は、「リズム」を核として構想された体操や表現舞踏の理論化、実践化を目指す運動である。フランス人声楽・演劇教師デルサル（François Delsarte, 1811-1871）が着目した身体運動の体験のもたらす意味は、アメリカ在住のオランダ人医師メンセンディエック（Bess Mensendieck, 1864-1958）の著作およびアメリカ人舞踏家ダンカン（Isadora Duncan, 1878-1927）の舞台を通じてドイツ人に身体性への関心を引き起こすきっかけをつくるが、身体性を軸とする教育を軌道にのせた功績はまずスイス人音楽教師ダルクローズ（Emile Jaques-Dalcroze, 1865-1950）に帰される。

ダルクローズは、音楽を介して身体に息を吹き込むことを目的とする教育をジュネーヴで提唱し、ドレスデン近郊の田園都市ヘレラウに設立されたジャック＝ダルクローズ研究所で1910年から1914年にかけて行われたリトミック的体操（rhythmische Gymnastik）の授業はドイツ全土で広く受け入れられる。その一方で、この手法をダルクローズとともに生み出したペロテ（Suzanne Perrottet, 1889-1983）、ペロテのもとで一度は即興演奏を学び次第に舞踏の理論的実践的指導者としての地位を確立していくボーデ（Rudolf Bode, 1881-1970）、ペロテをパートナーとして表現舞踏を理論的実践的に軌道にのせていくことに大きく貢献することになるラバン（Rudolf von Laban, 1879-1958）は、身体性のとらえ方をめぐって

<sup>24</sup> vgl. Wedemeyer 1999, 125. 20世紀初頭、ボンデッカー（Harry Bondegger）の手によって「日本の秘密科学」という副題をもつ『武士道』の解説書がベルリンで公刊されている。

<sup>25</sup> ドイツにおける神智学普及は、1894年にヒュッペ＝シュライデン（Wilhelm Hübbe-Schleiden, 1846-1916）が設立した「ドイツ神智学協会（Deutsche Theosophische Gesellschaft）」や1897年にハルトマン（Franz Hartmann, 1938-1912）が設立した「国際神智学親交会（Internationale Theosophische Verbrüderung）」によってはじまるが、1902年にはシュタイナー（Rudolf Steiner, 1861-1925）がその初代事務総長となる「神智学協会ドイツ支部（Deutsche Sektion der Theosophischen Gesellschaft）」が新たに設置される。

<sup>26</sup> vgl. Wedemeyer 1999, 25. 新教育運動のなかで神智学との関わりの深い人物としては、さらに、協会の設立および機関紙の発刊によって新教育運動を国境を越えて組織化することに貢献したエンソア（Béatrice Ensor, 1885-1974）も忘れてはならない。

ダルクローズとの差異を強調する教育家として歩を進めている。興味深いことに、ダルクローズと一線を画することを表明するペロテ、ボーデ、ラバンのなかには、それぞれ東洋の身体論との接点が見出される。

ペロテはダルクローズのリトミックにおいて身体が音楽に従属させられていることを疑問視し<sup>27</sup>、理性にも音楽にも拘束されない動き、すなわち「音楽に随伴されない動き」<sup>28</sup>の追求を目指してダルクローズから離反し、「音楽ではなく私自身のなかに根ざす」分化され解放されたリズムをよりどころとしてそこから生じた身体の動きを教育の基礎として確立する道をラバンとともに模索する<sup>29</sup>。ペロテは、太古のゾロアスター教から派生した中央アジア高地寺院教団であるマスダスナーンを介して東洋との接点を持ち、そこで呼吸法・緊張緩和・調和および集中修行を知ることになる<sup>30</sup>。

ペロテを協力者として得たラバンは、一度はダルクローズのリトミック的体操を学び、またシュタイナーのオイリュトミー (Eurhythmie) にも関心を示すが、やがて音楽にダンスを隷属させるダルクローズ方式に対置されるべき、また同時にダンカンのような「飛び跳ね (hüpfen)」方式の舞踏とも区別される、独自の体操リトミック (Gymnastik Rhythmik) を提唱する。ラバンにとって舞踏は、ニーチェの『ツァラトゥストラ』に暗示されているように、「生の全一性」の象徴であり、「触れることのできない表象として存在する宗教に連なる生き生きとした力」<sup>31</sup>に比されうるものである。スイスのアスコーナで行った夏期講習会を手がかりとしてラバンはみずからの求める舞踏の課程を「音・語・形 (Ton, Wort und Form)」<sup>32</sup>として方法化するが、「語」の授業のなかでは、李白 (701-762) らの手によって生み出された戦を主題とする感動的な中国古典詩歌の朗読が行われる<sup>33</sup>。

一方、ボーデはダルクローズが有機的存在である人間のもつ生命の表出であるはずのリズムをただの機械的で無機的なタクトとすりかえてしまっていると批判し<sup>34</sup>、時代の寵児となっていたヘレラウのジャッ

<sup>27</sup> ただし、ダルクローズ自身は、音楽は人間の外部にあって身体に押し付けられるものではなく、「われわれのなかに存在し、われわれの自然なリズムによって形成され」(Jaques-Dalcroze 1948, 149) るものと理解していたので、この理解にかんがみる限りにおいては、ダルクローズとペロテのあいだには決定的な対立は存在しない。

<sup>28</sup> Wolfenberger 1995, 76. ペロテはこの提案をダルクローズにするが、受け入れられなかった (vgl. a.a.O., 86)。

<sup>29</sup> vgl. Wolfenberger 1995, 92f. ペロテはダルクローズのもとを去った後、分断された身体の動きを捨て去り正常な身体の動きを回復するまでに数年を要したと述べる (vgl. a.a.O., 118)。ダルクローズの理論はペロテにとってあまりにも退屈なものであったが、これに対置されるラバンの説明は逆にペロテにとってあまりにも即興の度合いが高すぎるものであり、ペロテはそのいずれにも違和感をおぼえながら独自の道を模索することになる (vgl. Wolfenberger 1995, 290)。

<sup>30</sup> vgl. Wolfenberger 1995, 157. 一方、ラバンはマスダスナーンに対して警戒心を持ち、みずからとのあいだに生まれた息子をマスダスナーンに預けているペロテに対して「あまりマスダスナーンに近づかないよう」忠告している。ラバン自身は数秘学や錬金術に関心をもつフリーメイソン団体の会員であり、モンテ・ヴェリタで夏期講座を主宰していた1917年には東方聖堂騎士団 (O. T. O. = Orientalische Templerorden) を率いるロイス (Karl Theodor Reuss, 1855-1924) に誘われて神秘的真理支部 (Verita Mystica Lodge) に入会している。後にラバンはこの組織から離反し、みずから新たな結社を立ち上げている。

<sup>31</sup> Laban 1922, 8. 宗教に関する見解において、ラバンはその多くをユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) と共有している。舞踏家をめざす人々への推薦書としてラバンは文通仲間でもあるユングの手になる『リビドーの変遷と象徴』をあげている。

<sup>32</sup> vgl. Wolfenberger 1995, 103.

<sup>33</sup> vgl. Wolfenberger 1995, 115. ラバンの生徒のひとりビエンツ (Oskar Bienz) がこの朗読に長けていたことをペロテは回想している。ラバンがダンスの理論を構想するにさいして影響を受けたクラゲス (Ludwig Klages, 1872-1956) は、アジアを「女性的」な「知恵の文化」の宿場所とし、この文化のもっとも「繊細な花」が道教にみられると述べている (vgl. Klages 1949, 11)。

<sup>34</sup> ボーデによれば、ダルクローズがリズム (Rhythmus) と呼んでいるものは、正確には生気を欠いた周期的回復すなわち拍節 (Metrik あるいは Takt) である。すなわち、ダルクローズの手法にあっては、リズムによって身体の動きが生み出される過程において期待される全一性の回復はもとより実現されえないのであり、むしろ身体とその動きの統一を破壊してしまう危険をはらんでいる (vgl. Bode 1925, 14f.)。

ク＝ダルクローズ研究所に対抗するかたちで1919年、ミュンヘンに「身体教育のための学校」を設立する。しかし、ボーデの場合、「生の全一性」を回復する方途はみずからが属する民族性に求められなければならないと考える点において、インド舞踊への関心<sup>35</sup>の存在は指摘されるものの東洋へのまなざしはきわめて希薄であり、同じ理由から一身体文化運動の多くの担い手はその活動を中断せざるをえなくなる一国家社会主義の時代に身体文化運動存続のための新しい活路を見出すことになる<sup>36</sup>。

ところで、身体文化運動の影響は、ドイツにおける新教育運動を象徴する系譜として位置づけられる田園教育舎運動にもみられる。田園教育舎運動の代表的推進者の一人であるヴィネケン (Gustav Wyneken, 1875-1964) は、ドイツ青年運動に深くかかわることで早くから身体性に対する関心を持ち、たとえばホーエ＝マイスナー祭における舞踏を「若者にみずからの身体を再発見する道を開くもの」として評価している<sup>37</sup>。ヴィネケンによれば、若者は「身体性原則の担い手」、「身体感情の担い手」<sup>38</sup>であり、したがってヴィネケンの学園における教育実践はこの「身体感情」を育成することを要として構想されることになる。ヴィネケンにおけるこの身体性の理解もまた、東洋と無縁に育まれたものではないことが、たとえばみずからの主催する雑誌に老子の『道徳経』を掲載しているところからも推測される<sup>39</sup>。

この時代に特徴的な身体性を軸とする教育構想に通底しているのは、失われた「生の全一性」を回復することを志向し、その回復の糸口を東洋の宗教性に求めるという姿勢である。制度としての宗教が衰退していくなかで、「自己の理解や生命の解釈にみられる擬似宗教」<sup>40</sup>として東洋の宗教性は魅惑的な輝きをもって西洋の人々の眼前にたち現れていたといえる。自分の外にある絶対者(神)を指定してあるいはさらに仲介機関(教会)を立てることによって救済を祈るという依存形態ではなく、ほかならぬ自分の身体を手がかりとして自己救済の道を示す独立形態として現出した東洋の宗教性は、当時の西洋の心性にとってまさに捜し求められていたものであったからである<sup>41</sup>。

#### 4. おわりに — 身体性のもつ今日的意義 —

ふりかえって、日本の教育において身体性はどのような言説を生み出してきたのだろうか。新教育運動の時代、この運動の一端を担った小原国芳(1887-1977)が労働と芸術の合一による「全人教育」を提唱するとき、そこには間違いなく身体性への着眼があったといえる。またこの時代、日本においても加藤末吉が「関係の在り方」、「共振的コミュニケーションの基盤」、「働きかけの機(タイミング)を捉える主体」、「習慣的行動様式」として身体を意識した教育実践を行っていたことは注目に値する<sup>42</sup>。し

<sup>35</sup> vgl. Oelkers 1996 (1989), 282.

<sup>36</sup> vgl. Bode 1922, 12.

<sup>37</sup> vgl. Wyneken 1920 (1916), 156. 当時ヘレラウで教師であったシュタイガー (Willy Steiger) の「子どもはとりわけ Leib のことばを理解することができる (vgl. Wünsche 1982, 100)」という主張は、子ども期における身体感情のもつ教育的価値を肯定する発言として興味深い。

<sup>38</sup> Wyneken 1920, 155. この身体感情は、抽象的なプログラムによってではなく、カリスマによって支えられた指導者によってのみ充足されると、ヴィネケンは規定している (vgl. a.a.O., 167)。ヴィネケンの身体感情はしたがって、国家社会主義の理念に通底するものをすでに胚胎していたといえる。

<sup>39</sup> ヴィネケンは、モンテ・ヴェリタ共同体の設立メンバーの一員であり後に長い放浪生活を送ることになるグレーザー (Gusto Gräser, 1879-1958) を精力的に支援している。グレーザーは東洋哲学に造詣が深く一ヘッセ (Hermann Hesse, 1877-1962) もグレーザーに師事してヒンズー教のアーシュラマ修業を行っている—とりわけ老子が唱えた「無為の思想」への傾倒者として知られる。

<sup>40</sup> Koerrenz / Collmar 1994, 1. この形態は、「国家的社会的関心に導かれた宗教の形態」とともに今日にいたるまで教育理論に堆積する宗教の形態である。

<sup>41</sup> vgl. Baader 2002, 92.

<sup>42</sup> 加藤末吉については、齋藤 1997、224-254 参照のこと。

かし、日本の教育はその後、身体という問題を「タブー」視し<sup>43</sup>、その帰結として「模倣の教育、身体を動員した身ぐるみの学び」すなわち「修行」の伝統を喪失する方向へと移行していく<sup>44</sup>。

戦後日本の教育においては、1960年代、近代的な制度および思考の枠組みにからみ取られた状況にある人間に主体性を回復させる手がかりとして身体をとらえなおすという視点から身体論が興隆をみせたものの、この「身体」論がそのままのかたちで教育議論に反映されることはなかった。その理由として、齋藤孝はこの身体論において身体という概念のもつ「過度な多義性」と「適用性の拒絶」という特徴が、教育の主題として扱われるにさいしてひとつの障壁として働いたと判じている<sup>45</sup>。実際にそこに生きる人間の思惑とは無関係に生の全体性を疎外するという指向性をますます強めていく時代のただなかで、「曖昧な力のあふれる場所、過剰な意味の発生の場」<sup>46</sup>としてひとつの突破口となることを期待されている身体は、一義的なあるいは固定化された理解を否定するということをそもそも身上とするものであり、さらに教育という場で方法化していくという企てはそれ自体あらかじめ設定された帰結に対する矛盾を内包しているのである。

身体はたしかに戦後の学校教育においても、「健康教育の対象」、「運動能力の指標」、「管理の対象」<sup>47</sup>として取り上げられることはあった。しかし、こういった「学校化された身体」<sup>48</sup>に対置される「からだ」=「丸ごと全体」としての人間の在り方が1970年代、野口三千三と竹内敏晴によって問われるにいたり、教育における「身体」論はあらためて注目を集めることになる。「からだ」とは、「からっぽで他者に向かい、感じ、動く『丸ごと全体』の人間の在り方」<sup>49</sup>を指す概念であるが、ここでは「学校化された身体」との境界線をはっきりつけるという意味で、「各人の『存在様式』の次元を問題にした概念」であること、「身体の相互作用に基づいた生と生との『関係様式』の次元が問題にされる概念」であること、「権力関係を批判する疑念であること」という三点が確認される<sup>50</sup>。

「生の全一性」を喪失した西洋が世紀末に憧れた東洋。しかし「生の全一性」の回復を志向することは現在の日本においても強く求められている。この状況を反映して、「身体は主体である」という考え方と「身体は関係である」<sup>51</sup>という考え方の共存の提案、さらにここから生じた「生きられた身体」<sup>52</sup>は

<sup>43</sup> 佐藤 2002、11 参照。佐藤によれば、「いまの教育システムは全部をプログラムにしてしまっ」(同書、35)いて、分節化されないままの混沌とした自然、すなわち身体性を排除している。

<sup>44</sup> 佐藤 2002、16 参照。佐藤のこの認識は、「修行から始まって、道に至り、型に入って、型を抜けるという、日本人が古来もっていた学びのスタイルをよみがえらせる必要」(同書、30)の喚起へとつながっていく。

<sup>45</sup> 齋藤 1997、12 参照

<sup>46</sup> 同 書、31

<sup>47</sup> 同 書、38-39

<sup>48</sup> 同 書、42。齋藤によれば、「学校化された身体」とは、「管理的視線にならされ、自ら表現する力を衰えさせた」あるいは「学ぶ動機が欠如したまま教えられるサービスにならされ自律的に学ぶ力を無力化した」(同書、41)身体を意味する。矢野智司もまた、学校における身体形成を、「ミクロな権力が規律・訓練によって身体の内部に実現される」(矢野 1995、55)過程とみなしている。こうした「身体の教育」は教育の一般目標を達成するというマクロな視点から、具体的には器官の教育、随意運動の教育、性格の教育、知的教育という四分野を包含する「身体による教育」へと組みかえられるが、「生きられた身体」を忘却しているという意味においては—その鍛錬主義的狭隘さが克服されたとはいえ—「身体の教育」の延長上に位置づけられる(同書 73 参照)。

<sup>49</sup> この定義は、市川浩の「身」の概念にきわめて近いものとして把握される(市川 2003c、18-22 参照)。市川は、物理的空間の一点を占めるものとしての「身体」と、社会的空間の中で主体として生きる「身」を明確に区別して理解する(市川 2003b、139 参照)。

<sup>50</sup> 齋藤 1997、44-45 参照

<sup>51</sup> 同 書、7 参照。すなわち、身体は「近代的な制度と思考の枠組みの閉塞状況を突破するための概念」としておおらか位置づけられ、「文化/自然、生命/物質、言語/肉体、制度/主体、実体/関係、思考/行動、理性/情動、意識/無意識、自己/他者、管理/解放などのさまざまな二元論によってこぼれおちた生のリアリティを探り当てるための概念」(同書、31)として方法化への道からは距離をとりながら定着してきた。

<sup>52</sup> 矢野 1995、59 参照



子どもにおいてよりはっきりと見出されるという見解の呈示はじめ、100年前の教育議論を髣髴とさせる、しかしながら近年に改めて注目された現象学的知見を取り込んだ発言が昨今の教育議論では際立っている。ハーネベルク (Björn Haneberg) の指摘した「体験の普遍的共鳴板」としての Leib への注目は、高度にメディアの発達した時代にあって確実にその重要性を増している。さらに、宗教教育学の領域においても身体を根幹におく美的体験の次元を開拓する可能性が提起されていることにかんがみるならば、身体性をめぐる今後の教育議論はより広がりをもって活性化されていく可能性・必然性をもっているといえるだろう<sup>53</sup>。

### 【文献】

- Baader, Meike Sophia 2002: Erziehung als Erlösung. Religiöse Dimensionen der Reformpädagogik. In: Zeitschrift für pädagogische Historiographie. Jg. 8. H. 2. (89-97)
- Bode, Rudolf 1922: Ausdrucksgymnastik. München.
- Bode, Rudolf 1925: Rhythmus und Körpererziehung. Fünf Abhandlungen. Jena.
- Grimm, Jacob / Grimm, Wilhelm 1984: Deutsches Wörterbuch. Bd. 12. München.
- Haneberg, Björn 1995: Leib und Identität. Die Bedeutung der Leiblichkeit für die Bildung der sozialen Identität. Würzburg.
- 市川浩 2003a (1992): 精神としての身体 講談社
- 市川浩 2003b (1993): <身>の構造 身体論を超えて 講談社
- 市川浩 2003c (2001): 身体論集成 岩波書店
- Jaques-Dalcroze, Emile 1948: Le rythme, la musique et l'éducation. Paris / Lausanne.
- Klages, Ludwig 1949: Goethe als Seelenforscher. Zürich.
- Kunstmann, Joachim 2002: Religion und Bildung. Zur ästhetischen Signatur religiöser Bildungsprozesse. Gütersloh.
- Koerrenz, Ralf / Collmar, Norbert (Hrsg.) 1994: Die Religion der Reformpädagogen. Ein Arbeitsbuch. Weinheim.
- Laban, Rudolf von 1922: Die Welt des Tänzers. Fünf Gedankenreigen. Stuttgart.
- Linse, Ulrich 1991: Asien als Alternative. In: Kippenberg, Hans G. / Luchesi, Brigitte (Hrsg.): Religionswissenschaft und Kulturkritik. Marburg. (325-364)
- Linse, Ulrich 2001: Mazdaznan. Kult? Gesundheitslehre? Weltanschauung? In: Schnurbein, Stefanie v. / Ulbricht, Justus H. (Hrsg.): Völkische Religion und Krisen der Moderne. Entwürfe »arteigener« Glaubenssysteme seit der Jahrhundertwende. Würzburg. (268-291)
- Dangl, Oskar: Körpersymbolik und Sinne in der Bibel. Zur Bedeutung der Sinne im Kontext der Ästhetisierung von Bildung. Ms.
- Meyer-Drawe, Käte 2000: Die Not der Lebenskunst. Phänomenologische Überlegungen zur Bildung als Gestaltung exzentrischer Lebensverhältnisse – Fünf Überlegungen. In: Dietrich, Cornelia / Müller, Hans-Rüdiger (Hrsg.): Bildung und Emanzipation. Klaus Mollenhauer weiterdenken. Weinheim / München. (147-154)
- 中沢新一 2000: 序にかえて 魂の技術 (坂口ふみ / 小林康夫 / 西谷修 / 中沢新一編集 『宗教への問い 5 宗教の闇』 岩波書店 所収) (v-vi)
- Nietzsche, Friedrich 1968: Also sprach Zarathustra. Ein Buch für Alle und Keinen. In: Colli, Giorgio / Montinari,azzino (Hrsg.): Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe. Sechste Abteilung. Erster Band. Berlin.
- 西谷啓治 2001: 宗教と非宗教の間 岩波書店
- 西村恵信 1999: ニヒリズムの構図 (村上陽一郎 / 細谷昌志 編 『叢書 転換期のフィロソフィー 第4巻 宗教・その原初とあらわれ』 ミネルヴァ書房 所収) (57-74)

<sup>53</sup> vgl. Kunstmann 2002, 371f. クンストマンによれば、近年の陶冶理論を意識した宗教教育学には、「はっきりと身体に関連づけられた内容をもつ概念」(a. a. O., 372) を獲得しようとする傾向がみられる。

- 宗教・その原初とあらわれ』 ミネルヴァ書房 所収) (57-74)
- Oelkers, Jürgen 1996: Reformpädagogik. Eine kritische Dogmengeschichte. Weinheim.
- 齋藤孝 1997: 教師=身体という技術 - 構え・感知力・技化- 世織書房
- 佐藤学 2002: 身体ダイアログ 太郎次郎社
- Wedemeyer, Bernd 1999: Der Athletenvater Theodor Siebert (1866-1961). Eine Biographie zwischen Körperkultur, Lebensreform und Esoterik. Göttingen.
- Wedemeyer, Bernd 2001: "Ich-Kultur" und "Allerlei Sport." In: Schwab, Andreas / Lafranchi, Claudia (Hrsg.): Sinnsuche und Sonnenbad. Zürich. (90-103)
- Wedemeyer, Bernd 2002: Von Asien nach Europa. Aspekte zur Rezeptionsgeschichte fernöstlicher Körperpraktiken. In: Prohl, Inken / Zinser, Hartmut (Hrsg.): Zen, Reiki, Karate. Japanische Religiosität in Europa. Hamburg. (249-266)
- Wedemeyer, Bernd 2004: Der neue Mensch, Körperkultur im Kaiserreich und in der Weimarer Republik. Würzburg.
- Wünsche, Konrad 1982: Die Muskeln, die Sinne, die Reden. Medien im pädagogischen Bezug. In: Kamper, Dietmar / Wulf, Christoph (Hrsg.): Die Wiederkehr des Körpers. Frankfurt am Main. (97-108)
- Wolfensberger, Giorgio J. (Hrsg.) 1995: Suzanne Perrottet. Ein bewegtes Leben. Weinheim / Berlin.
- Wyneken, Gustav 1920: Der weltgeschichtliche Sinn der Jugendbewegung. In: Wyneken, Gustav: Der Kampf für die Jugend. Gesammelte Aufsätze. Jena. (149-170)
- 矢野智司 1995: 子どもという思想 玉川大学出版部
- 湯浅泰雄 2003 (1990) : 身体論 東洋的心身論と現代 講談社